

身分は低くとも誠実な心の持ち主が報われる、という仏教説話。物語のひとつの典型。

これも今は昔、堀川兼道公太政大臣と申す人、世心地大事に煩ひ給ふ。御祈どもさまざまにせらる。世にある僧どもの参らぬはなし。参り集ひて御祈どもをす。殿中騒ぐ事限なし。

ここに極楽寺は、殿の造り給へる寺なり。その寺に住みける僧ども、「御祈せよ」といふ仰もなかりければ、人も召さず。この時にある僧の思ひけるは、御寺にやすく住む事は、殿の御徳にてこそあれ。御失せ給ひなば、世にあるべきやうなし。召さずとも参らんとて、仁王経を持ち奉りて、物騒がしかりければ、中門の北の廊の隅にかがまり居て、つゆ目も見かくる人もなきに、仁王経他念なく読み奉る。

二時ばかりありて、殿仰せらるるやう、「極楽寺の僧、なにがしの大徳やこれにある」と尋ね給ふに、ある人、「中門の脇の廊に候」と申しければ、「それ、こなたへ呼べ」と仰せらるるに、人々怪しと思ひ、そこばくのやんごとなき僧をば召さずして、かく参りたるをだに、よしなしと見居たるをしも、召しあれば、心も得ず思へども、行きて、召す由をいへば参る。高層どもの着き並びたる後の縁に、かがまり居たり。

「さて参りたるか」と問はせ給へば、南の簀子に候よし申せば、「内へ呼び入れよ」とて、臥し給へる所へ召し入れらる。無下に物も仰せられず、重くおはしつるに、この僧召す程の御気色、こよなくよろしく見えければ、人々怪しく思ひけるに、のたまふやふ、「寝たりつる夢に、恐ろしげなる鬼どもの、我が身をとりどりに打ち領じつるに、びんづら結ひたる童子の、楚持ちたるが、中門の方より入り来て、楚してこの鬼どもを打ち払へば、鬼どもみな逃げ散りぬ。『何ぞの童のかくはするぞ』と問ひしかば、『極楽寺のそれがしが、かく煩はせ給ふ事、いみじう歎き申して、年来読み奉る仁王経を、今朝より中門の脇に候ひて、他念なく読み奉りて祈り申し侍る。その聖の護法の、かく病ませ奉る悪鬼どもを、追ひ払ひ侍るなり』と申すと見て、夢覚めてより、心地のかいのごふやうによければ、その悦いはんとて、呼びつるなり」とて、手を摺りて拝ませ給ひて、棹にかかりたる御衣を召して、被け給ふ。

「寺に歸りてなほなほ御祈よく申せ」と仰せらるれば、悦びてまかり

<sup>1</sup> 傍線は読解に役立つ重要語だから辞書で調べる。数字は単なる注釈ではなく読解で意識するポイント。

出づる程に、僧俗の見思へる気色やんごとなし。中門の脇に、ひねもすにかがみ居たりつるおほえなかりしに、殊の外美々しくてぞまかり出でにける。されば人の祈は、僧の浄不浄にはよらぬ事なり。ただ心に入りたるが験あるものなり。「母の厄して祈をばすべし」と、昔より言ひ伝へたるも、この心なり。